

席をたづねて來りしが、とある所に座して、竹筒より酒を出し、醉をす、めて花見るさま也。

〔水鳥記〕鎌倉甚鐵坊先懸附さめやすが事

今樽次も此山中にてかゝるまれのにあふこそふしぎなれ、いかさま是はみづからをたぶらかさんとして、きつねかむじなのわざと覺えたり、さあらば一勺さづけてくれんとて、すいづいてなげつけ、○下

〔武家義理物語〕發明は瓢箪より出る

やうく淀の小橋を過ぎ、水車の夕波おもしろく、是を肴にして、吸筒取出し、二人さし請もせはしければ、後に乘たる兩人も呼びませて、酒事をかしく成りぬ。

〔撮壤集〕中家屋、家具類、瓢箪

〔易林本節用集〕比器財、瓢箪

〔雍州府志〕土產、壺盧、或謂葫蘆、又稱瓠瓜、又謂匏瓜、倭俗謂瓢箪、又稱浮壺、便、凡壺酒器也、盧飯器也、

老硬者作盛藥佳器、或盛山椒粒、或用繩繫腰、盛酒茶爲遊山之具、是稱腹壺、以其腹有約束也。

〔本朝食鑑〕三乾瓢

附錄、瓢、瓢及壺盧者、總稱也、瓠子訓、布久邊、瓠瓜亦同、蒲盧者、俗謂百生瓢、箪也、俱不食、但暴乾、可用器、此亦正二月下、種莖葉花並與瓠同、大者作酒瓢、炭瓢、小者去犀、入椒及丸散、香煎之類、或作佩、後全好、近代爭誇奇爾、乾

〔鷲峯文集〕十九ノハ瓢說

靜軒野氏求得一瓢、其爲形也、曲而斜、斜而垂、名曰ノハ、嗚呼瓢兮、其在架也、懸而垂者ノハ、今掛之于壁、亦ノハ也、盛酒于此、置盃盤之間、則隨手之所觸而ノハ也、酒盡而眠、則ノハ也、而又ノハ也、攜之以賞花、則與風枝ノハ也、腰之對月、則與人影ノハ也、無物可觸、無物可對、則其形之ノハ、自若也、嗚呼瓢兮、動亦ノハ、靜亦ノハ、奇哉異哉、熟視利奔名走之人、則朝ノハ于權貴之門、暮ノハ於侯伯之第、及夜歸